

タイトル	イングランド人の国王ハロルド2世の一族とその経歴
著者	常見，信代
引用	北海学園大学人文論集，36：261-288
発行日	2007-03-31

イングランド人の国王ハロルド 2 世の 一族とその経歴

翻訳 常見 信 代

1065 年ごろ Edward the Confessor の妃 Edith が自分の輝かしい家族の歴史を書くように依頼している。そこで指示した歴史とは、おそらくその同じころ William of Jumieges が書いた『歴代ノルマンディ公の事蹟』のような一種の叢伝と思われるが、その本来の意図は妃の家族が 1066 年に没落したことによって頓挫し、その後、Edith の夫である King Edward の『伝記』として完成された。12 世紀中葉に Edward が聖人に列せられたとき、この『伝記』が Edward の聖人伝のもとになったのである；夫の死後の名声が Edith の一族への賛辞を不完全ではあるが保存することになったのはこうした事情からである。その作品は、現在では『ウェストミンスタに眠れるエドワード王の伝記』（*Vita Edwardi*、以下『エドワード伝』）の名で知られているが、1065-66 年に書かれたと思われるその第 1 部には、Edith の父で伯の Godwine の経歴や兄弟たち、とりわけ伯であるハロルドと Tostig の経歴が述べられている。

『エドワード伝』の著者の名前はわかっていないが、彼は 11 世紀の同時代人たちと関心を同じくしている。人柄についてあれこれ書くよりも、対象としている人物が王たる者や聖性の理想像にどのくらい近いのか、あるいは

* 本稿の骨子は、英国王立歴史学会研究員であるアン・ウィリアムズ博士が、2006 年 11 月 21 日に北海学園大学（札幌）でおこなわれた人文学部特別講演会で発表されたものである。翻訳にあたっては、ハロルド（2 世）以外の人名はカタカナ表記をとらず、すべて英文どおりとした。

は遠いかという観点で書くことを好んでいるのである。したがって、この著作を読めば Edith の最も有名な兄弟(彼女のお気に入りではなかったが)の人柄がわかると期待すべきではない。ハロルドとその弟の Tostig は次のように紹介されている。

「2人ともそろって魅力的で品位があり、ともに体力があり勇敢である。しかし、兄のハロルドのほうが背は高く、不眠不休で食事も取らずに際限無く続く仕事を上手にこなし、気性は穏やかで、飲み込みが早い…。性急あるいは軽率という欠点もあるが、これは誰にでもある欠点である」。

明らかにこれは常套句なのである。『エドワード伝』の著者がハロルドの外交手腕を書くときには、もう少し具体的なことが出てきているようである：「ハロルドはフランクの君主たちの人柄や政策、能力を従者を通してだけでなく自分でも調べている；そして、器用にまた持ち前の巧妙さによって彼らから何を得ることができると読み取った」。「持ち前の巧妙さ」という文言は、危険な旅で有名なローマへの巡礼の箇所では、ハロルドが「用心深いあざ笑いを浮かべてあらゆる危険を切り抜けた」という表現と響きあっている。弟の Tostig は兄ハロルドほどには運がよくなかった。というのも、彼の一行は盗賊に襲われ、Tostig は家中のひとりの自己犠牲によって逃げるのがやっとであったからである。「持ち前の巧妙さ」と「用心深いあざ笑い」、それに有名な「ハロルドは気前よく誓いごとをしすぎる」というのがハロルドの性格に最も近い表現であろう。Wace が『ルー物語』の中で「ハロルドに会ったことのある人が髪は赤いと言っていた」と述べているが、これ以外にハロルドの容姿に言及したものはもちろん何もない²⁾。

ハロルドの人物像のほとんどは我々には知らされていないが、彼の家族と公的な経歴は当時の記録に詳細に記されている。ハロルドは父方を通してサセックスの人であった。というのは、1009年にケント東部の港サンウィッチに国王の船が集合したとき、サウス・サクソンのセイン Wulfnoth

cild が何らかの罪で訴えられているが、彼がハロルドの父方の祖父であることはほぼ確かだからである³⁾。「Wulfnoth は逃走し、それから船を誘って 20 隻になると南海岸に沿って略奪を行い、あらゆる損害を与えた」ことから、祖父がこの地方のかなりの人物であったことは明らかである；*cild* は、後期古英語では高い地位の人びとに用いられる呼称である⁴⁾。ノルマン・コンクエストの前夜に、ゴドウィン家はサセックスの担税地の約 3 分の 1 を所有しているが、その大半は Wulfnoth からの相続地と推測される。

ハロルドの母方の祖父については、Thorgils Sprakaleg という名前しか知られていない。Thorgils には娘 Gytha と二人の息子 Ulf and Elaf がいた。彼らは、スケイニャ出身のデーン人と思われる。なお、スケイニャは、現在はスウェーデンにあるが、11 世紀にはデンマーク王国の一部であった。この家はきわめて有力な縁故をもつ。1015 年かその前に、Ulf がデンマーク王 Swein Forkbeard の娘 Estrith と結婚して Cnut の義兄になった。Cnut は、1017 年から 1035 年までイングランドの国王になっただけでなく 1020 年代までにデンマークとノルウェーの国王にもなっている⁵⁾。1022 年か 1023 年に Godwine と Ulf の姉妹 Gytha とが結婚するが、この結婚をまとめたのはおそらく Cnut であろう⁶⁾。

Godwine 自身は 1018 年から南東部イングランドの大部分を保有する伯になり、1023 年からはウェセックス伯領全体を保有して初代のウェセックス伯として権威を行使した；また、Godwine が Cnut の発給する公文書に ‘senior earl’ と署名するのは 1023 年からである⁷⁾。Cnut がなぜ Godwine をそのように厚遇したのか理由は不明であるが、Godwine の上昇がデーン人の国王に負っていることは明らかである。Godwine の結婚から生まれた上の子どもたちは、Swein、ハロルド、Tostig と Edith である。Swein が長男でハロルドが二男であるが、Edith の位置がはっきりしない。彼女はハロルドよりも、さらには Swein よりも年長かもしれない。したがってハロルドは Godwine の 2 番目か 3 番目の子どもということになり、それであればハロルドの出生は最も早くて 1025 年か 1026 年ということになる；ハロルドは 1045 年に伯になっているから、出生が 1025 年よりずっと後とい

うことはありえない⁸⁾。ゴドウィン家の遠縁の親族はほとんど記録されていない；おそらく1066年のこの家の大々的な没落が親族関係を主張する勇気を失わせたのであろう。中世末期の伝承では、Godwineは1063年から1066年までウィンチェスタのニュー・ミンスター修道院の修道院長であったÆlfricと兄弟とされている。Ælfricはヘースティングズの戦いで死んでいるから、兄弟ということもありえる。Godwineのもう一人の親族がカンタベリのChrist Churchの修道士Ælric(またはÆthelric)で、彼は1050年に大司教に推挙されたが、King Edwardが修道士たちの選択を無効にしている⁹⁾。Gythaの甥でUlfの息子であるSwein Estrithsonが1047年にデンマーク王になり1076年まで王位にあった；彼の兄弟BeornはEdward the Confessorからイングランドの伯領を与えられている¹⁰⁾。SweinとBeornはゴドウィン家の上の子どもたちと同年代であったと推測される¹¹⁾。

ゴドウィン家はイングランドで最も富裕な家になったが、どのような段階を経てこの富を手に入れたかを再現することはできない。1035年にCnutが没するまでにGodwineは、イングランドで最も有力な俗人のひとりで、対抗できるのはマーシア伯のLeofric(c.1023-57)だけであった。ゴドウィン家の影響力は、Cnutの死後に生じた王位継承争いの中にあらわれている。Cnutの存命中でさえ、彼の「北部帝国」は解体途上にあった。ノルウェーの人びとは既にCnutに反旗を翻して、ノルウェー王Magnusがデンマークを手に入れようとたくらんでいたからである。MagnusはCnutとノルマンディのEmmaとの間に生まれたHarthacnutに阻まれたが、イングランドではCnutと最初の妻Ælfgifu of Northamptonとの間に生まれたHarold IがHarthacnutに挑戦していた¹²⁾。Harold Iはマーシア伯Leofricやマーシアとノーサンブリアのセインおよびロンドンに基地をおく国王の船隊に支持されていた(LeofricはÆlfgifuの家と姻戚関係にあったのだろう)¹³⁾。Harthacnutはデンマークにおいてノルウェーの侵入に対処していたから、イングランドにおける彼の権利は母Emmaが守ることになり、『アングロ・サクソン年代記』が言う

ように、「Godwine は彼らの最も忠実な僕であった」¹⁴⁾。実際には、Godwine がハロルド 1 世派へ寝返り、局面を一変させて Harold I を国王として受け入れさせたのである。

なぜ、Godwine が Harthacnut 支持から Harold I 支持へと変わったのか理由はわかっていない；ただ偶然的な事情が記録されているだけである。1036 年に Æthelred II の亡命していた息子たちが王位継承レースに加わることを決めたことである。兄の Edward がサウサンプトンを襲って追い払われ、失敗に終わったが、弟 Alfred は相当な兵力を伴ってイングランドに上陸し、母 Emma が Harthacnut のために市と国庫を守っているウィンチェスタに向かった。しかしながら、Alfred は、Earl Godwine に行く手を阻まれて Harold I に身柄を引き渡されてしまい、結局、Harold I の命令で Alfred が殺される結末となったのである。「何の罪もない王子」の死に加担したことによって、Godwine は Alfred の義兄で 1040 年に国王位につく Harthacnut と、また、Alfred の実兄で 1042 年に Harthacnut の後を継ぐ Edward the Confessor と、対立することになった¹⁵⁾。しかし、このときまでに、Godwine の権力は Harthacnut も Edward も罷免することのできないまでに強大になっていた。実際、Edward the Confessor の治世の初期に Godwine の権威が拡大・強化され、1043 年に Godwine の長男 Swein のためにヘリフォードに基盤をおく伯領が創設され、1045 年 1 月には Edward the Confessor が Godwine の長女 Edith と結婚している。その年の後半に国王は Edith の兄ハロルドをイースト・アングリアの伯領に、Edith の従兄弟の Beorn Estrithson を東部ミドランドの伯領にそれぞれ昇進させている。しかし、King Edward が Godwine を厚遇したのは、自らの判断で行ったというよりも、むしろ便宜的なものであった。1040 年代を通じて国王は、Godwine とその一族と釣り合いを保たせるために徐々に一つの派閥を作っている。そのメンバーは Edward が母 Emma の親族のもとに長く亡命していた間 (1016-1041) に知己となったフランス人とノルマン人から集められた。その中で最大の有力者が Robert of Jumieges で、彼に国王は 1044 年にロンドン司教座を与えている¹⁶⁾。

Godwineの長男Sweinは一族の厄介者であったようで、彼の行動は父の地位に役立つものではなかった。Sweinが自分はGodwineの子ではなくてCnutの子であると主張したといわれている。憤慨した母は、この主張をはねつけるために、ウェスト・サクソンの高貴な女性の一団を集めて、SweinはGodwineとの間にできた自分の子であると宣誓証言させている¹⁷⁾。Sweinは、1046年にレオミンスタの女子修道院長を誘拐し、彼女との結婚の許可が拒絶されると、彼女を手放すことをよりもイングランドを離れる道を選んだ。Sweinの土地と官職は弟ハロルドと従兄弟のBeornの間で分けられたが、1049年にSweinが和解を求めて姿を現したときには、ハロルドもBeornもとても喜んではいられなかった。Sweinが公然たる喧嘩からBeornを殺害してしまい、罪を逃れて亡命したのである。最終的にはウスタ司教Ealdredの尽力によって赦免され、Sweinは1050年に土地と伯領に復帰することが認められている。

1050年までにKing Edwardが最も強力な伯であるGodwineの野心をくじくことができると確信したことは明らかである。国王は、殺害されたBeornの伯領をGodwineの若い息子たちにはなくて自分の甥Ralphに与え、また、有利な結婚を甥に用意している。国王はまた、カンタベリ大司教の任命に対するGodwineの利益を無効にした。1050年に大司教でゴドウィン派のEadsigeが死亡すると、修道士らはChrist Churchの修道士でGodwineの血縁のÆlricを大司教に推挙した¹⁸⁾。しかし、1051年にロンドンで開かれた顧問会議で、国王はその推挙を破棄して自分の親友Robert of Jumiegesを選んだのである。「その間、聖職者はみな力の限りを尽くしてその悪事に抗議した」が¹⁹⁾、彼らの不満は無視され、Robertはパリウムを受け取るためにローマに向かった。

Godwine支持者たちのもう一つの不満は、「Earl Sweinの領地であるヘリフォードシャーで外国人たちが城を建造し、国王のこの地方の臣民たちにあらん限りの損害と侮辱を加えている」ことであった²⁰⁾。この城は、おそらくヘリフォード自体にあったと思われ、King Edwardの従者でノルマン人もしくはブルターニュ出身のOsbern Pentecostが建てた「ペンテコステ

城」であることはほぼ間違いない²¹⁾。ほぼ同じ頃に、国王のもう一人のフランス人従者 Robert fitzWymarc がハロルドの伯領にあるクラヴァリング (エセックス) に城を建てている²²⁾。三つ目の城が King Edward の義弟 Eustace of Boulogne のために Godwine 自身の伯領に属するドーヴァーで一時、計画されていたようである²³⁾。ドーヴァーで起きたことについては、『アングロ・サクソン年代記』の「E テキスト」の中に最も詳しく説明されている。「E テキスト」は、この当時、Godwine とその一族に同情的であったカンタベリの St Augustine's で記録されていた。そこには次のように記されている。

「Eustace が海を渡って国王のもとに来て、自分の望みを伝えて帰路についた。東に向かう途中カンタベリに寄り、従者たちとともにそこで休息を取りドーヴァーに向かった。ドーヴァーの手前、数マイルのところで Eustace が鎖帷子をつけると彼の同行者たちもみなそれを着用した。ドーヴァーに着くと都合のいいところで宿泊したいと考えた。そこで、Eustace の従者のひとりがある家^{あるじ}にやって来て泊まりたい旨を伝え、家の主^{あるじ}が断ると従者が切りかかり、主^{あるじ}がその従者を殺した。それから Eustace とその一行が馬に乗ってその家^{あるじ}に行き、主^{あるじ} (*husbunda*) を炉の上で殺した²⁴⁾。その後、ドーヴァーの町に向かい、町の内と外で 20 人以上の人を殺した。その反対側でドーヴァーの市民 (*burhmenn*) が 19 人を殺害し、傷つけた人の数は数え切れないほどであった。Eustace はわずかな連れと逃げて国王のもとに行き、そのときの様子について偏見に満ちた説明をすると、国王はドーヴァーの市民に激怒した。それから国王は Earl Godwine を呼びにやり、ケントを逆襲するように伯に命じた。…自分の領地に損害を与えることをためらって伯はこの遠征に同意しないであろう」。

『アングロ・サクソン年代記』には国王と Eustace の議論の中身を示唆するようなことは何もないが、Eustace がドーヴァーで混乱の起きるのを期待

していたことは明らかである(そうでなければ、従者たちがみな完全武装して馬に乗ったりはしない)。彼の従者と市民との戦いはおもに断崖の上にある鉄器時代の丘砦で行われており、11世紀初め、そこには、おそらく Godwine の保護のもとであろうが、新しくミンスター教会が建てられていた²⁵⁾。Eustace がこの防御の跡地を継承して城を建てるべきだというのが国王の意図であったと思われる²⁶⁾。

Eustace とドーヴァの人びととの喧嘩騒ぎは1051年の7月に起きている。その当時、国王はグロスタに滞在し、Godwine とその息子たちはグロスタシアのビーヴァストンに彼らの伯領の従者を集めていた。そこは Godwine のマナーであるバークレイの付属地であった。King Edward が Leofric と Siward の2人の伯に軍を招集してグロスタの国王のもとに来るように命じた。国王の顧問官たちは、2つの軍にはイングランドで最も高貴な人びとの大部分がいるから、彼らが戦闘に加わるのは大変な愚行であると言って注意を促した。敵が侵入する道を開き、大変な荒廃をもたらすことになるかと顧問官たちは考えたのである²⁷⁾。

秋分の日(9月25日)にロンドンで顧問会議が招集された；Godwine とハロルドが出頭するように呼ばれた。しかし、Swein は、おそらく過去の履歴のためであろう、直後に追放されている。その夏遅く Godwine の支持は揺らぎ始めた。『アングロ・サクソン年代記』の「Eテキスト」によれば、Godwine の従者たちが「国王陛下 (*cynehlaford*) に反旗をひるがえすのを嫌がった」という。そして9月末、ロンドンの顧問会議で国王は「伯らが抱えているすべてのセインを要求し、…、彼ら全員が国王に引き渡された」。「Eテキスト」は著しく Godwine 寄りであるが、「Dテキスト」は伯たちが「国王と戦う用意はあった」としているが、彼らは実際には戦わなかった。しかし、その「Eテキスト」でさえ9月を通して Godwine に対する支持が衰えハロルドのセインたちが国王側に移ったことを記録している。『エドワード伝』は、「Godwine に従って亡命できる人間は幸せ者である」と書いているが、言っている趣旨は同じである；Godwine 支持者の大部分は、伯が地位を回復したいと望むなら支持を約束するという激励のメッセージに

留めたのである²⁸⁾。

Godwineの支持が衰えていることは明らかであり、大司教 Robert が1036年に起きた国王の弟 Alfred 殺害の共犯として Godwine を公然と訴えたのはこのときであった。ロンドンの集会に出席するための通行証を拒否されると、望みがまったく絶たれたと判断して Godwine は、Swein とともに妻 Gytha や若い家族を連れて馬で彼らの船があるボザムに向かい、ブルージュに渡った。そこにはフランドル伯の義妹 Judith と結婚式をあげたばかりの三男 Tostig がいたのである²⁹⁾。伯ハロルドは弟 Leofwine とともに Bristol に向かい、アイルランド行きの船に乗った。ウスタ司教 Ealdred が黙過してくれて国王の兵士に捕まらずにすんだが、結果として司教は国王の恩顧を失うことになったと思われる³⁰⁾。King Edward は Godwine の娘である妃 Edith を拒み、国王の義妹が修道院長をつとめるフェアウェルの女子修道院に幽閉した³¹⁾。ゴドウィン家失墜の衝撃の大きさが『アングロ・サクソン年代記』の「D テキスト」の中で次のように強調されている。

「そのようなことが起こりうると聞いたら、イングランドの人なら誰でも驚くであろう。なぜなら、Godwine は国王と全イングランドを支配するまでの高みに登りつめ、また、彼の息子たちは伯であり国王の寵臣であり、しかも娘は国王と結婚しているから」。

しかしながら、Godwine は簡単に追い払われることにはならなかった。彼は息子の義兄であるフランドルの Baldwin V から心からの援助を受け、一方、ハロルドはレンスター王 Diarmid の援助によってアイルランドで船を集めていた。1052年に Godwine の一族は大勢を率いて帰国し、自分たちの復権および所領と伯領の回復を国王に迫り、また自分たちの敵の中心人物たち、とりわけカンタベリ大司教 Robert of Jumieges の追放を強く迫った。Swein だけは帰国しなかった。家族の圧力を受けて、あるいは良心の咎めからか、彼はブルージュからエルサレムへの巡礼に旅立ったのであ

る；旅の全行程を裸足で歩いたといわれているから、巡礼はおそらく後者の理由からであろう。彼はエルサレムからの帰途リュキアで1052年9月29日に亡くなり、コンスタンティノーブルに埋葬された。

その6カ月後に、Godwineが長男Sweinの後を追った。1053年の復活祭の日(4月11日)にウィンチェスタで国王と会食中に突然、足台の上に崩れ落ち、言葉も力もまったく失ってしまった。Godwineは(息子のハロルド2世、TostigとGyrthによって)国王の私室に運ばれ、息子たちは父の死期が近いと考えた。しかし、そうではなかった。予想に反して、Godwineは話すことも、あるいは力を出すこともできない状態のまま生存し続け、木曜日(4月15日)にその生涯を閉じた。ウィンチェスタのOld Minsterに埋葬されている³²⁾。彼の死はゴドウィン家の地位を弱める2回目のチャンスにKing Edwardに与えたと考えられるが、実際には国王は1052年に面目を失って以来、公的な問題に興味を失ってしまったようである。それ以後、国王の関心を占めたのは狩猟を楽しむこととウェストミンスターに自分の修道院を建立することであった。1053年以後、イングランドの統治は大部分がハロルド＝ゴドウィンソンの手に握られたのである。

ハロルドは1053年に父のウェセックス伯領を継承した。彼が以前に有していたイースト・アングリアにおける支配権はマーシアのLeofricの息子Ælfgarに譲ったが、1055年にノーサンブリア伯Siwardが亡くなると、その後継伯にはハロルドの弟Tostigがなり、Siwardの息子Waltheofは無視された。その翌年から数年間、ハロルドの家とマーシア伯の家との対立が続いた。1055年にÆlfgarが亡命しているが、その理由は残存史料に一切書かれていない³³⁾。

Ælfgarも、Godwineやその息子たちと同じく外国で支援者を見つけ、アイルランドでは軍船を雇い、ウェールズでは最も有力な支配者であるグウィネッツの王Gruffudd ap Llewelynと同盟を結んだ；このときか、少し後にGruffuddはÆlfgarの娘Ealdgythと結婚している³⁴⁾。GruffuddとÆlfgarはヘリフォードシャーに侵入し、King Edwardの甥で伯のRalphとその兵に迎えられたが、「一本の槍も投げられないうちにイングランド軍

は逃げてしまった。なぜなら、彼らが馬に乗っていたからである。そして、そこで多くの(イングランド)の人びと——おおよそ400人か500人——が殺されたが、彼らは報復としてひとりも殺したりしなかった」³⁵⁾。土壇場で勝利を取めたのはハロルドとウェセックスの軍であった。ただし、ヘリフォードが略奪され、そのミンスター教会が焼き討ちにあっている；要塞を再建し、Ælfgar にイースト・アングリアの伯領を回復するとの条件を含む和平協定を整えたのもハロルドであった。1057年にマーシア伯 Leofric が死ぬと、息子 Ælfgar がマーシアを継承した。しかし、イースト・アングリアは Godwine の四男 Gyrrh に与えられた。同年に Earl Ralph が死亡したことによりヘリフォードを基盤とする伯領はハロルドの手に入り、他方でミドランド東部の伯領は分割され、北部は Tostig に、南部は弟の Leofwine に渡った³⁶⁾。こうして今やハロルドの生存している三人の兄弟がすべてイングランドの伯領を保有することになったのである；彼らのコントロール下にはないのはマーシアだけであった。またもやその理由は不明であるが、1058年にマーシア伯 Ælfgar が追放され、その彼が「Gruffudd の援助を受けて暴力によって」復帰したことは、多分驚くほどのことではないだろう。Ælfgar の消息は1062年以後一切聞かれない。おそらくその年に亡くなったのであろう；彼の息子 Edwin がマーシア伯になっている。

ハロルドが軍事指揮者として名を成したのは Ælfgar の女婿 Gruffudd に対する戦争においてである。1191年ごろにまとめられた『ウェールズ案内』の中で、Gerald of Wales はハロルドをノルマン・コンクエスト以前にウェールズ人に対して戦争を行った王の中で最も偉大な王と書いている；それ以外の王として Gerald は、マーシア王 Offa とノーサンブリアの王 Æthelrith をあげている³⁷⁾。1063年にハロルドが船隊を、Tostig が陸隊を率いて海と陸から連携して Gruffudd に対する遠征が開始され、この戦いの中で Gruffudd が自分の従者に殺された；彼の義弟たちがハロルドと同盟したのはそれからである³⁸⁾。ハロルドが Gruffudd の未亡人でマーシア伯 Edwin の姉妹 Ealdgyth と結婚したのはこの頃であろう；それがいつ行われたにせよ、この結婚がマーシアの領主たちとハロルドとの和解を

狙った政治同盟であったことは明らかである³⁹⁾。

『アングロ・サクソン年代記』の「Cテキスト」によれば、1065年の夏に、「伯のハロルドがウェールズのポートキュートに何かの建築を命じ…そこにたくさん品物を集め、King Edward を狩猟に招こうと考えていた」という。しかし、8月24日に、南ウェールズからの一団が襲撃して建設中の狩猟用宿舎を破壊し品物を運び去り、そこで働く人びとを殺した；「それから、ミカエル祭(9月29日)の後に、ヨークシアのすべてのセインがヨークに集結して、そこで見つけることのできた Tostig の家中戦士全員を殺害、Tostig の金庫を持ち去った」という⁴⁰⁾。ノーサンブリアの反乱は、統合の不完全な王国に存在した地方の「分離主義」のあらわれと広く解釈されているが、この反乱が King Edward にではなくて Tostig 個人に向けられたものであることは明らかである⁴¹⁾。John of Worcester と『エドワード伝』の著者は、反乱の原因として、Tostig と王妃 Edith が行ったとされる北部の有力者3人の殺害をあげている；また John of Worcester は、これに加えて Tostig がノーサンブリアで行った莫大な貢租の不正な徴収をあげている。北部人の要求の中に Cnut の法の更新が含まれている事実は、Tostig もまた、King Edgar や Æthelred II の法に認められるのと同様に、デンローとイングランドの他の地域との間にある差異を解消しようとしていたことを示している⁴²⁾。

北部人の第一の要求は Tostig の法外放置と Ælfgar の息子 Morcar をノーサンブリア伯にすることであった。彼らが伯に Siward の息子 Waltheof ではなく Morcar を選んだのは、部外者であり妥協の候補であったという仮説によって通常は説明されている⁴³⁾。実際には、Morcar は母 Ælfgifu を通してノーサンブリアの伯領と優先的なつながりを持っていたと思われる；Ælfgifu の父 Morcar は Æthelred II の時代にこの地域の有力者であり、母 Ealdgyth は同王のもとでノーサンブリアのエアルドルマンをつとめた人物の姪であった⁴⁴⁾。明らかなのは、King Edward が Tostig を切ることに同意しなかったことであり、国王が北部人の要求に実質的に譲歩する内容の協定をまとめたのはハロルドであったことである。『エド

『ワード伝』は、Tostig に反対した張本人は兄のハロルドであったことをほのめかしている；実際にも、Tostig は北部人を扇動して自分に敵対させたとして兄ハロルドを責めたと言われている⁴⁵⁾。この非難には幾分の事実があったのかもしれない。ノーサンブリアにおける Tostig の支配は明らかに政治的な荒廃をもたらしていた。Morcar が伯になって最初に行ったことの一つは、Tostig の不人気な代官 Copsi をタイン川北部の付属伯領から追い出してその地位を在地の支配者 Osulf に与えることであった。また、Siward の息子 Waltheof は、埋め合わせとしてかつて Tostig 自身が保有していた東部ミドランドの伯領を与えられた。ハロルドは、Morcar の姉妹 Ealdgyth と既に結婚していたと思われ、しきりとマーシア人とノーサンブリア人とを和解させたがっていたのである。

しかしながら、Tostig は侮辱され、それを兄ハロルドの裏切りのためと思いついた。国王の援助の見込みもなく、彼はイングランドを去って義兄 Baldwin of Flanders のもとに逃れた。『エドワード伝』の著者は、ハロルドと Tostig のこの争いが二人の没落の原因と見ている。何故ハロルドがそのように Tostig に損害を与え不和を決定的にするような危険をおかしたのか？ その答えはおそらくイングランドの王位継承問題にある。既に明らかのようにハロルドは有能で野心的な男であった。「バイユーのタピスリー」はハロルドを「イングランド公」(*dux Anglorum*)としているが、この称号はパリ伯 Hugh the Great が帯びた「フランス公」(*dux Francorum*)を想起させる。というのも、彼の息子 Hugh Capet が 987 年にフランスのカロリングの王に取って代わったからである⁴⁶⁾。もしハロルドが同じ野心を持っていたとしたら、この目的を達成するためにはマーシア伯と北部の有力者双方の全面的な支持が必要であり、Tostig の過酷な支配はハロルドにとってきわめて不利なものであった。

ハロルドが Edward の後継者になれるといつから考え始めたのか、正確には不明である。Edward と Edith の結婚は明らかに跡継ぎを生むことが目的であったが、成功しなかった；1051 年に Edward が妻を遠ざけたのは、彼女と Godwine との関係だけでなく子どもがいないことが原因で

あったと思われる。当時40歳代末になっていたEdwardがもう一人の妻との間に子どもを持つことは不可能ではなかった。しかし、その間(一時的に)、Edwardが母方の親族に向きを変え、ノルマンディ公Williamにイングランド王位を提供することは自然なことであった⁴⁷⁾。1052年のGodwineの帰国とEdithの復位がEdwardの2回目の結婚を阻んだだけでなくノルマン人との同盟をも不可能にしたのである；King Edwardのノルマン人支持者のあまりにも多くがGodwine一族の政敵であった。このため1054年に国王はウスタ司教Ealdredをドイツに派遣している。司教の任務は、国王の甥のEdwardを探すことであった。彼はEdmund Ironsideの息子で、子どものときにCnutの刺客から護るためにハンガリーに送られていた⁴⁸⁾。証聖王が使者にハロルド支持のEaldredを選んだことは、彼が国王の有能な交渉人であったとはいえ、意味ありげであろう。しかしながら、ハロルド自身が1056年11月にはサントメにいる。おそらくイングランドに行く途中のÆthelingに会うためであったと思われる⁴⁹⁾。結局、Edward Æthelingは1057年に故国の土を踏んだ直後に死亡した。『アングロ・サクソン年代記』の「Dテキスト」が、「いかなる理由で、彼が親族であるKing Edwardの顔を見ることを許されなかったのか、我々にはわからない」との不可解なコメントを記している。このコメントは不正行為を意味すると受け取られているが、誰の利益を護ろうとしたのか理解するのは難しい。

Edward Æthelingの死によってウェスト・サクソン王家の血を引く男子は、King Edwardを別にすれば、Æthelingの息子で1052年ごろに生まれたEdgarが最後となった⁵⁰⁾。国王がEdgarの成人するまで長生きすることはほとんどありえなかった。1057年までに国王は50歳代半ばになっていて、長寿の家系ではなかった；彼の父Æthelred IIは47歳頃に、祖父Edgarはわずか33歳でそれぞれ死亡している。ノルマン側の史料によれば、1064年にハロルドがノルマンディ公Williamを訪ね、誠実宣誓して支持を誓っているが、この背後にはそうした考慮が働いていたのかもしれない⁵¹⁾。この問題にEdwardがどのような役割を果たしたのか明瞭とはいえ

ないが、たとえ Edward が実際に 1064 年に Duke William に対して新しく約束をしたとしても、それ以前に既に一度、心を変えたことがあり、さらに死の床で再び心を変えることになる。ハロルドを自分の王位継承者に任命するからである⁵²⁾。

1066 年 1 月 5 日に Edward が亡くなり、翌日にウェストミンスタの彼の新しい教会の内陣に埋葬された。この教会は前年の 12 月 28 日に献堂されたばかりであった。葬儀が終わると直ちに、ハロルド 2 世のイングランド人の国王としての聖別式がウェストミンスタ修道院で執り行われた。ウェストミンスタで国王の戴冠式が行われるのはこれが最初であった。式を司ったのはハロルドの友人で今やヨーク大司教である Ealdred であった。『アングロ・サクソン年代記』にあるように「王国を支配している限り、ハロルド 2 世に平穏は訪れなかった」⁵³⁾。

災難を予告するのに 8 月 24 日にハレー彗星が現れる必要はなかった。4 月末あるいは 5 月初めに、Earl Tostig がワイト島に到着した。この島の大部分は彼に属しており、そこで兵糧を調達すると、南海岸を荒らしながらサンウィッチに向かったのである。ハロルドの方では、これまでにない規模の水陸両軍を招集している。理由は、King Edward の血縁である Duke William がイングランドを征服するつもりでノルマンディから来ることを事実として知らされたからである⁵⁴⁾。Tostig は北部に逃亡したが、Earl Morcar と Earl Edwin の兄弟に撃破されてスコットランドに敗走し、「大あたま」とあだ名される Malcolm III の宮廷でその夏を過ごしている。

1066 年の夏から秋の間、イングランド軍が南部諸州で戦闘準備態勢に入り、船隊がワイト島を基地に英仏海峡をパトロールし、東部海岸はノーフォークのホームにある聖ベネト修道院長 Ælfwold の護衛船に委ねられた。9 月 8 日までのほぼ 4 か月にわたり、水陸両軍が一体となって防衛体制が維持されたが——中世の指揮官には驚くべき手柄であるが——もはやこれ以上、続けるのは不可能であった。陸上軍は警戒態勢を解かれ、船隊はロンドンに帰還した。船から降りたとき、ハロルド王は、300 隻を超えるノルウェーの船隊がハンバー川に着いたことを知った。Tostig が予期せぬ

方向から援助を受けていたのである。ノルウェー王 Harold Sigurdson Hardrada (「苛烈王」) はスカンディナヴィアの最も手ごわい軍隊王のひとりであった。1066年に Harold が介入したのは、後世のサガの伝えることとは違って純粹に日和見であった；ヴァイキングのリーダーたちにとって政情不安の国というのは、はした金を稼ぐ常に有望な資源であった。Hardrada はノーサンブリア沖で Tostig と合流し、両者の船隊がリッカルに上陸してヨークに向かった。9月20日に彼らはゲートフルフォードでノーサンブリア伯 Morcar, マーシア伯 Edwin 兄弟に迎撃されたが、激しい戦闘の後にイングランド軍は逃走してしまった。ヨークではその門をヴァイキングに開くように強制し、市民たちは「Hardrada とともに南下してこの国を征服することに合意」し、和を結んだ⁵⁵⁾。Hardrada と Tostig はヨークの東にあるスタムフォードブリッジで宿営を設けた。

ハロルド＝ゴドウィンソンは、9月8日にサンウィッチを離れ、ロンドンでノルウェー軍上陸の最初の知らせを受け取っている。『アングロ・サクソン年代記』の「Cテキスト」によれば、「それからすぐに可能な限りの軍隊を集めて昼夜兼行で北に向かった」という。ロンドンからヨークへのハロルドの強行軍は有名であるが、それも当然である。準備と近隣の軍隊の集結に数日かかるとして、彼はおそらく9月18日かその直前にロンドンを発ったであろう。9月24日にハロルドと彼の軍勢はヨークの南9マイルにあるタドキャストに到着している。翌25日には、ヨークを「まっすぐ突き抜けさせて」軍を16マイル離れたスタムフォードブリッジに進撃させた。スタムフォードブリッジの戦いについて、同時代人が書いたものは『アングロ・サクソン年代記』の「Cテキスト」だけである。それによれば、イングランド人は橋の向こう側からノルウェー人を急襲して両軍の合戦となり、その日おそくまで激戦が続いた。そこでノルウェー王 Harold と Earl Tostig が殺され、彼らとともにノルウェー人、イングランド人双方の無数の人びとが殺され、生き残ったノルウェー人は逃亡したという⁵⁶⁾。

アイスランドの歴史家 Snorre Sturlusson がその著書『ヘイムスクリングラ』(『世界の輪』)の中でこの戦いについて書いているが、それは史料的

根拠の無い話である。というのも、Snorre (1179-1241) は 13 世紀に書いているからであり、また、説明の根拠にヘースティングズの戦いに関する記述を使っているからである。それにもかかわらず、私は、二人の国王の出会いを描いた Snorre の有名な一節を思わず引用したくなるのである。

「イングランド王の一行の中から 20 人の騎手がやってきて、そのひとりが「ここに Earl Tostig はいるか」と聞くと、Tostig は、「否定しないが、貴殿ならわかるだろう」と答えた。それから、もう一人が言った。「貴殿の兄上であるハロルド王から、貴殿もノーサンブリアも和平を結ぶことができるように言われて来たのだ。国王は貴殿を拒まず、むしろ王国の三分の一を貴殿に与えようとされている」。Tostig が、「もし、この提案を受け入れるなら、国王 Harald Sigurdson のご尽力には何をもって応えるのか」と尋ねると、騎手は、「イングランドの土地 7 フィートを与えよう。そのお方の背が高いなら、その分だけ多くしてもよい」と答えた。「行って、ハロルド王に戦闘の準備をするように伝えろ。我々は同じ目的のために結束している；死ぬか、さもなければイングランドを征服するかのどちらかだ」と Tostig が応じると、騎手たちは帰っていった。国王 Harald Sigurdson が「流暢に話していたあの騎手は誰か」と聞くと、「あれがハロルド＝ゴドウィンソンだ」と Tostig が答え、「なんと小男なことか。それでも鎧に足をかけて堂々と立っていたな」と国王が兵士たちに向かって言った。

ハロルド＝ゴドウィンソンの Harold Hardrada に対する勝利は、イングランド軍がヴァイキングの軍勢と戦って勝利した中で最も決定的な戦いの一つであった。Harold の龐大な軍勢のうちノルウェーに戻ったのは国王の息子、「平和人」Olaf 指揮下の積荷船 24 隻だけであった。Micael Woods が言うように、ハロルド＝ゴドウィンソンは、「アングロ・サクソンの古典的な戦法」を取っていた。つまり、「敵からかなりの距離のところにあらかじめ集結地を決め、騎乗軍がそこまで前進して夜明けに敵地まで進

み、ついで選りすぐりの重装備隊が密集して襲いかかった」のである⁵⁷⁾。この戦法で、Alfredが878年にエディントンの戦いに勝利してGuthrumの軍に和平を強制し、ウェセックスから撤退させている。もし、ハロルド＝ゴドウィンソンがスタムフォードブリッジの戦いの後に戦傷で死んでいれば、Edmund IronsideやÆthelstan、Alfred自身と並んで彼もイングランドの偉大なる軍隊王のひとりとして記憶されたであろう。

ハロルドとその従者たちがヨークで休息を取って勝利を祝っていたとき、Duke Williamが9月28日ごろペヴェンジに上陸し、南海岸を荒らし回っているとの知らせが届いた。ハロルドは南下を開始した。10月7日か、そのころにロンドンに着き、そこで5日間を費やして新たな兵を集めた。10月12日には、集めることのできた兵士や自身のエリート護衛兵らとともにロンドンを発っている；弟の東部ミドランド伯Leofricとイースト・アングリア伯のGyrthが同行した。スタムフォードブリッジでの消耗した戦闘の直後に、大急ぎでDuke Williamと戦う用意をする責任を負うことになったのである。しかし、この件についてはハロルドに選択の余地はほとんどなかった。サセックスはハロルドの所領と権力の心臓部であり、そこをノルマン軍の略奪に任せておくわけにはいかなかったのである。

ハロルドが北部で勝利をもたらした戦術を繰り返そうとしたことは明々白々である。彼が目指した集結地は、現在のバトルのちょうど北にあるコードベクの丘の「古い林檎の木」であった。

そこから、南7マイルにあるヘースティングズの新しく建造した城にいるDuke Williamへの攻撃を開始しようとしたのである。しかしながら、Duke Williamの情報機関はHarold Hardradaのそれよりも優れていた。ハロルド王が近づいてきたことを察知して迎え撃とうと前進したのである。夜通し行進して10月14日に集結地に着くと、ハロルドはノルマン軍がヘースティングズではなくて、バトルの南のテラム・リッジにいるのを知った⁵⁸⁾。「ハロルドの軍が戦列を整える前に」公はハロルドの不意を襲ったのである⁵⁹⁾。ハロルドは、現在のバトルの町が立っている急な峰に沿って兵士を配置した。その下は谷間で公の騎士軍が展開するのはきわめて困難

であった。午前 9 時ごろに戦いが開始され、一日中、戦闘が荒れ狂ったが、日がかげり出したころ、ついにノルマンの騎士軍がイングランド兵の盾の壁を突破して国王を殺害した⁶⁰。弟の Gyrth と Leofric は既に倒れ、イングランドの残兵はサセックスのウィールドの深い森の中に逃げ込んだ。

Duke William の称賛者である William of Poitiers によれば、イングランドの軍旗、つまりウェセックスのホワイト・ドラゴンの旗の周囲で行われた最後の戦闘は激烈をきわめ、イングランド側の死者は身元を判別できないほどであった；ハロルドの死体は切断されていて、顔だけでは誰か分からず、横に弟らが倒れていたことからようやくハロルドと同定されたほどであったという。また、ハロルドの母 Gytha が遺体を引き取るために息子と同じ重さの金を差し出したという⁶¹。その後どうなったかについては、意見が分かれる。William of Poitiers は、Duke William が身代金を拒否して遺体の埋葬を Willaim Malet にまかせたと言っている。別の史料には、遺体は国王にだけ許される紫のクロークに包まれてヘースティングズ近くの断崖の上に埋葬されたとさえ書かれている⁶²。

しかしながら、William of Malmesbury が 1125 年ごろに執筆された著作の中で、Duke William が身代金を受け取り、ハロルドがパトロンであったウォールサム修道院の聖十字架教会に埋葬するのを許したと書いている。この教会の歴史が 1177 年の直後にひとりの修道士によって書かれている。彼は、1124 年ごろに給仕としてこの教会に入っていたのである。修道士の主張するところによれば、遺体は、ハロルドの最初の妻 Edith Swan-neck が「彼女にしか分からない特徴」によってハロルドであることを確認し、Duke William の許可を得て埋葬のためにウォールサムに運ばれたという。ウォールサム年代記の無名の著者によれば、修道院の聖具係であった Thurkil が国王の遺体が着いたときのことを覚えていて、彼が言うには年配者たちが骨にまで達した傷跡を手で触った様子を話していたのを聞いたことがあるという。当時、給仕であった著者自身は、ハロルドの亡骸が 1120 年代に新しく建立された教会堂の内陣に移されるのを目撃している⁶³。現在、ウォールサムにあるのは 12 世紀のこの教会の遺跡である。た

だし、最近の発掘で12世紀以前の建物の土台がいくつか現れ、ハロルドの建てた教会がゲルマン様式のプランであったことが証明されている；発掘報告書はハロルドの教会の内部が立派であったことを明らかにしている。ロマネスク様式の教会の中で今日、残っているのは身廊だけであるが、祭壇の跡を取り囲んでいる内陣の壁と柱の基底部分を見ることができ、その前にくたびれた墓石が立っている。ここは教会を創建した人が埋葬される場所であり、直接の証拠は皆無であるが、ハロルド2世・ゴドウィンソンの最後の永眠の場であると言い伝えられている。墓碑銘は、ハロルドを敬愛していた John of Worcester の作で、次のように刻まれている。

「ここに眠る王は、^{いくさ}戦の誉れたかく、逞しく、立派な方であった：
振舞い気高く、マカベウスの再来であった。もし神が願ったなら、
偉大な真の王となられた方」⁶⁴⁾

Appendix

『エドワード伝』の著者は、自分のパトロン一族を惜しみなく賞賛しているが、おそらくこのお世辞と後に Edward Augustus Freeman が大著 *History of the Norman Conquest of England* の中で甚だしく賛美したために、Earl Godwine とその息子たちは King Edward の治世の悪しき守護神とみなされるようになったのである。T. J. Oleson は、「この家のとどまることのない野心が証聖王の治世の大半を占める混乱の原因であり、外国勢力に対してアングロ・サクソン人の王家を守ることができなかつた原因である」と容赦なく書いている (*The witenagemot in the reign of Edward the Confessor*, 1955, p.1)。Robin Fleming は、晩年の King Edward が、非常に有能で幾分不謹慎な伯ら一族に圧迫され脅されていたと解釈している (*Kings and earls in Conquest England*, p.53)。Frank Barlow は国王の能力を積極的に評価しているのであるが(「リアリストである Edward は、自分では大きく変えることのできないとして状況を受け入れたのであろう」)、それにもかかわらず、Edith とハロルドそして Tostig の支配がこの国に破滅をもたらしたと見ている (*Edward the Confessor*, pp.197, 189)。これらは、Æthelred II に対して下されるべき類の判決で

ある。ただし、この場合は同時代人の支持はほとんど得られないであろうが；『アングロ・サクソン年代記』の「Cテキスト」は Godwine の一族に対する敵意をあらわにしているのであるが、その「Cテキスト」でさえ King Edward を追悼する詩の中にハロルドへの賛辞を加えている。「いかなるときも自らの主君の命令に言行ともに忠実に従い、王の必要に怠ることなく応えた気高き伯」(ASC 'C', 1065. 詩は「Dテキスト」にもあるが、Godwine とその一族に最も同情的である「Eテキスト」にはない)。

〔註〕

- 1) 著者がフランドル人であることは確かであり、イングランド人びいきの修道士 Goscelin of Saint-Bertin かもしれない。
- 2) *Ço dist quil vit qu'alques fu ros*: Glyn S. Burgess (trans.), *Wace: The Roman de Rou* (St Helier, Jersey, 2002), line 6798, p.244-5; この文章は、ハロルドがきわめて横柄であるという話と対になっている (*forment orgueillos*)。
- 3) ASC 'F', 1009. John of Worcester は、Wulfnoth に対する訴えは不当であると信じていたにもかかわらず (*JnW* ii, pp.460-1), Wulfnoth は訴えどおりに有罪であるとあまりにも簡単に考えられてきた。Stenton は、Wulfnoth が 20 隻の乗組員たちに忠誠心を捨てさせ、南海岸に連れて行って海賊行為をさせたと言っている (*ASE*, p.382); Allen Brown は Wulfnoth を「裏切り者」と書いている (*The Normans and the Norman Conquest*, p.66)。Wulfnoth を訴えたのは Brihtric であるが、その兄弟であるマーシアのエアドルマン Eadric Streona は、1015 年にセインやエアドルマンの没落を企んだ張本人であり、殺害された者の中にはノーサンプリアのセイン Sigeferth と Morcar も含まれている。Sigeferth の未亡人はその後 Edmund Ironside と結婚しているが、関係はそれ以前にさかのぼるかもしれない。というのは、Sigeferth が Edmund の兄弟 Æthelstan ætheling (1014 没) の遺言により遺産を受領しているからである。遺贈のもう一つは Wulfnoth の息子 Godwine なる者に対しておこなわれ、彼が父親のものであった Compton にある所領をもらうことになる。人名と言い、地名と言い、どちらもよくある名前であるが、サセックスのコンプトンにある所領は後に伯である Godwine の家と結びつけられている。Godwine と Wulfnoth が 'æthelings' 派の一員で、Eadric Streona の一派に敵対していたとすれば、1009 年に

Brihtric が Wulfnoth に対して起こした訴えには、きわめて陰険な側面があったことになる。Brihtric 自身は 1009 年以後、姿を消すが、殺されたのであろう (Keynes, *Diplomas of King Æthelred 'the Unready'*, p.216)。John of Worcester が Godwine の父親を Brihtri と同じ家の出身とみなし, Eadric Streona の甥としているが、それは年代的にありえない。

- 4) 中世末期のボーダー地方のバラッドでも ('Childe Maurice hunted the silver wood'), シェイクスピアの Childe Roland of the Dark Tower という謎めいた言及においても、未だに敬称の意味で使われている。cild の文字通りの意味は 'boy, young man, retainer' であり、(拡大して) 'warrior' の意味である；近代英語ではもちろん 'child' の意味である。Æthelnoth cild と 'the Kentishmen' を、または、Æthelnoth と 'the Kentishman' を、あるいは Æthelnoth 'of Canterbury' を、比較せよ。
- 5) Campbell, *Encomium*, p.85; Freeman, *NC i* (2nd edn, 1870), pp 748-51.
- 6) 彼はすでに Elaf にグロスタシアにある伯領を (1018 年以前に) 与えていた。
- 7) (まず第 1 に) ケントは例外である；収入の 3 分の 1 は伯の取り分であるが、ケントではこの third penny は大司教 Æthelnoth (1020-38) のものであり、彼の後任 Eadsige のときになってはじめて Godwine に移った (Brooks, *Early history of the church of Canterbury*, pp.295-303)。
- 8) Swein は、1043 年に伯領を与えられているから、おそらく 1025 年かそれ以前に生まれたであろう；三男 Tostig は、1051 年に結婚しており、生まれたのが 1030 年よりかなり前ということはないであろう。長女の Edith は、1045 年に結婚できる年齢 (つまり、少なくとも 14 歳) になっている。したがって 1031 年より後の生まれということはいえない。
- 9) この Ælric は、1057 年から 1070 年に William I によって罷免されるまで Selsey の司教であった Æthelric のことであると指摘されてきたが、この考えは魅力的である；Æthelric of Selsey は、Christ Church の修道士であったことも知られており、これが 1070 年の失脚の原因となったのであろう。というのも、これ以外の理由では説明できないからである (Ian W. Walker, *Harold: the last Anglo-Saxon king*, Stroud, 1997, pp.203-4)。しかし、名前は珍しくはない。
- 10) Ulf は、Cnut のもとでデンマークの摂政の任に短期間あったと思われるが、王であった義兄と不和になった。2 人は最終的には和解したが、1030 年に Cnut が彼を殺害した。

- 11) 三人目の兄弟 Asbjorn が 1069 年にイングランドに現れている。Estrith は夫の Ulf よりも身分が高かったから、Ulf の息子らは父称よりもむしろ母称 (母親の名前) を受け継いだ。
- 12) Cnut は Emma と結婚したとき Ælfgifu を離縁せず、彼女は 1020 年代末までノルウェーで摂政をつとめ、2 人の間の息子 Swein に代わって統治している。しかし、デンマークから派遣された軍が 1035 年に Cnut の死の直前に Magnus とその支持者らによって追放された。
- 13) これらが毎年ヘレゲルド (*heregeld*) から支払われた有名な *lithesmen* である。
- 14) ASC 'E' 1035.
- 15) ASC 'C' 1036.
- 16) しかしながら、Robert は 1046 年までは司教として証人になってはいない。
- 17) *Hemingi Chartularium*, pp.275-6. これはうわさにすぎないかもしれない (Ann Williams, 'The spoliation of Worcester', *ANS* 19 (1997), pp.385-6, 399-400 参照)。
- 18) Brooks, *Early history of the church of Canterbury*, pp.295-303. Eadsige は 1050 年 10 月 29 日に死亡した。
- 19) Barlow (ed.), *Vita Edwardi*, pp.18-9.
- 20) ASC 'E', 1051.
- 21) 彼の甥、Alvred of Marlborough (Alvred はブルトン人が特に好んだ名前である) は、ヘリフォードシアの Thornlaw ハンドレッド (おそらく Pencombe) に土地を保有し、また、King William から非常に多くの土地を受け取った。その中には、Godwine とハロルドの亡命中に Osbern Pentecost が保有していたヘリフォードシアの伯の土地も含まれている (*GDB*, fo. 186, *Domesday Book: Herefordshire*, ed Frank and Caroline Thorne, Chichester, 1983, no. 19,6 and note)。「ペンテコステ城」は、1066 年以後、同じく Alvred of Marlborough が保有した Ewias Harold のこととみなされてきた。しかし、'An introduction to the Herefordshire Domesday', in *The Herefordshire Domesday*, ed. Ann Williams and R. W. H. Erskine, London, 1988, p.11 参照。
- 22) 1052 年に敗北した「フランス人たち (*Frencisce menn*)」がロンドンから西の「ペンテコステ城」に逃れ、さらに、北の Robert の城に逃亡した (ASC 'E' 1052); R. Allen Brown, *Castles from the Air*, Cambridge, 1989, pp.90-1

参照。

- 23) ASC 'D', 1051. 「Dテキスト」は、ヘリフォードの城には言及していないが、国王が Eustace 自身と彼の従者だけでなく「城の中にいるフランス人たち」をも裁くのを辞めるように Godwine が要求したと書いている。これがヘリフォードの城であった可能性はあるが、文面どおりではドーヴァ自体にあった砦の意味である。John of Worcester もこの意味に受け取っている。*JnW* ii, pp.560-1: 'the castle on the cliff at Canterbury' (*sic, recte* Dover: *in Doruernie*).
- 24) したがって、彼らは死罪である *hamsocn*, つまり自分の家の中にいる人物を襲った罪を犯したことになる。
- 25) Tim Tatton-Brown, 'Churches of the Canterbury diocese', in Blair (ed), *Minsters and parish churches*, p.110. また、1040年代初頭の S. 1472 (Robertson, *Anglo-Saxon Charters*, pp.190-1)参照。その中で、Godwine が St Augustine's とドーヴァの司祭 Leofwine との間の協定を仲介している。(Ann Williams, 'The Anglo-Norman abbey' in Richard Gem (ed.), *St Augustine's Abbey, Canterbury*, London, 1997, p.62). Godwine の相続人であるハロルドが教会の土地に幾分の関心を示している (*GDB*, fo. 2)。
- 26) コンクエスト後の城は、ヘースティングズやペヴェンジにあるように、コンクエスト以前にあった教会を取り込んで一体化している (A. J. Taylor, 'Evidence for a pre-Conquest origin for the chapels in Hastings and Pevensey castles' *Chateau Gaillard*, 3, 1969, 144-51)。1064年に伯ハロルドがノルマンディ公のためにドーヴァに城を建造すると約束をしたことを William of Poitiers が記録している。さらに、William of Poitiers は1066年のノルマン人による攻撃の説明の中で *castellum* に触れ、「崖の上であって、天然の急斜面がいたるところで人の手で垂直に切り取られ、まるで海からまっすぐにそそりたつ壁のようであり、飛んできた矢を打ち落とせるほどの高さである」と書いている；しかしながら、彼は征服王がドーヴァに8日間、滞在して、「*castellum* に欠けていた防御工事 (*firmamenta*) を加えた」と付記している (Foreville(ed.), *Gesta Guillelmi*, pp.104-5, 211-12)。1067年に Eustace が占拠しようとしたのはこの城であった (*Williams, The English and the Norman Conquest*, pp.15-6)。
- 27) ASC 'D' 1051.
- 28) *Vita Edwardi*, p.25
- 29) 『アングロ・サクソン年代記』の「Dテキスト」によれば、1051年9月末

に一族がブルージュに逃れたとき、TostigとJudithはすでに結婚していたことになるが、*Vita Edwardi* (Barlow (ed.), pp.24-5)によれば、Godwineが息子の結婚の祝宴を終えた直後にブルージュに到着したことになっている。Eustace of BoulogneはBaldwinの敵対者であり、結婚はEdwardとEustace of Boulogneとの議論に余分な要素を加えることになった(Heather Tanner, 'The expansion of the power and influence of the counts of Boulogne under Eustace II', *ANS*, 14, 1992, pp.251-86)。

- 30) 『アングロ・サクソン年代記』の「Dテキスト」1051：「国王はロンドンから司教Ealdredを兵とともに派遣した。彼らは(ハロルドを)捕らえる予定であったが、そうすることが出来なかった。あるいは捕らえようとはしなかった」(Vanessa J. King, 'Ealdred, archbishop of York: the Worcester years', *ANS* 18, 1996, pp.127, 134)。
- 31) *Vita Edwardi* は、明らかに国王の拒絶を認めることが出来なくて彼女が育った場であるWiltonに退いたと書いている。
- 32) ASC, 'C' 1053.
- 33) 彼の亡命はTostigと関係があるのかもしれない。というのは、彼の妻Ælfgifuはノーサンブリアの有力者MorcarとEaldgythの娘で、マーシアの貴族Wulfric Spot (1002没)の姪であり、Wulfricの兄弟のÆlfhelmが993年から1006年までノーサンブリアのエアドルマンであったからである。Ælfgifuの末の子どもたちは、MorcarやEaldgythと名づけられている。おそらく彼女の父と母に因んでであろう。エアドルマンÆlfhelmの方はどうかと言えば、Cnutのイングランド人妻であるÆlfgifu of Northamptonの父親であり、国王ハロルド1世の祖父であった。ハロルド1世とマーシアの伯との関係についてはすでに注目したところである。こうした状況の中でÆlfgarは、デーンローの影響力ある一族とのつながりがこの地域とは何の関係もないGodwineの息子よりも、より適した選択をさせてくれたのだと感じたであろう。
- 34) Kari Maund, 'The Welsh alliances of Earl Ælfgar of Mercia and his family', *ANS*, 11 (1989) pp.181-90. GruffuddとEaldgythの娘がNestで、Richard's CastleのOsbern fitzRichardの妻になった。
- 35) ASC 'C', 1055.
- 36) 1055-58年についてチャーターは皆無であり、Gyrthが伯として証人になるのは1059年が最初であるが、彼は1055年にÆlfgarの一時的な亡命の間ノーフォークを保有している(Barlow, *Vita Edwardi*, p.33)。Ralphの東

部ミドランドの伯領については、Williams, 'The king's nephew: the family and career of Ralph, earl of Hereford', pp.338-40 参照；Gyrthと同様に、Leofwineも1059年から伯として証人になっている。彼はハーフォードシアとミドルセックスを保有し、バッキンガムシアも保有していたと思われる。しかし、Leofwineとケントやサリ、スタフォードシアとを結びつけている史料は信頼できない。

37) *Descriptio Cambriae*, ii, 7: 「彼は軽装歩兵の先頭に立って徒歩でウェールズに進み、現地の食糧に依存しながらウェールズ全域を大変なエネルギーでくまなく行軍し、^{だんし}「男子は一人たりとも残さなかった」 [I Samuel 25.22; I Kings 16.11]。彼の成功を記念して、また彼自身の不滅の霊に捧げて、「ここでハロルドは勝利した」と刻んだたくさん石が彼の勝利した場所を示すために建てられているのを見つけるでしょう」。Geraldはさらに続けてウェールズでノルマン人が成功した原因をコンクエスト前にイングランド人が遂行した弱体化策に求めている。John of Salisburyもハロルドの戦術を称賛している (*Policraticus* vi, 6, John Dickinson (ed.), *The Statesman's Book of John of Salisbury*, NY, 1963, pp.194-5)。

38) ASC 'D', 'E', 1063.

39) マーシア北部のハロルドの土地はEaldgythの嫁資であったかもしれない (Barlow, *Edward the Confessor*, p.243 and note 6; Williams, 'Land and power in the eleventh century: the estates of Harold Godwinson', p.176)。彼はもちろん既にEdith (Eadgyth) 'Swanneck' と結婚しており、彼女がハロルドの上の子どもたちの母親になった。2人の結婚は,CnutとÆlfgifu of Northamptonとの結婚のように、おそらく「手握り婚」(デーン人の慣習)であろう。ÆlfgifuはCnutがノルマンディのEmmaと結婚した後も彼の妻であり続けた；そのような結婚は教会が認めていなかったから、たとえ最初の配偶者が存命中であっても、もう一度結婚することは完全に可能であった。

40) ASC, 'C', 'D', 1065. John of Worcesterは虐殺を10月3日としている。

41) 1069-70年に北部人がWilliam Iに対して反旗を翻したとき、彼らが王として選んだのはデンマークのSweinでも、自分たちの中からでもなく、ウェスト・サクソン王家最後の貴人Edgarであったことは興味深い (Williams, *The English and the Norman Conquest*, pp.32-3)。

42) *JnW* ii, pp.598-9; ASC 'D', 'E', 1065. 「デーン人の間」の相続上納税はウェセックスやマーシア、イースト・アングリアにおけるよりも著しく軽い

(II Cnut, 71)。

- 43) Barlow, *Edward the Confessor*, p.236; Kapelle, *The Norman Conquest of the North*, p.101. Earl Siward は, 1041 年に Earl Eadulf of Bamburgh が死亡するとノーサンブリアの北部と南部をとともに保有した; 彼は, 死亡した伯の姪 Ælfflæd と結婚し, 彼女が Waltheof の母になった。
- 44) 註 33 参照。
- 45) Barlow (ed.), *Vita Edwardi*, pp.51-5. *Vita Edwardi* の説明は詳細であり, 他の史料にはない内容である (Barlow, *Edward the Confessor*, pp.233-9 参照); 『アングロ・サクソン年代記』の「C テキスト」の内容は, 「D テキスト」とも「E テキスト」とも違っている。また, D と E のテキストはいずれも John of Worcester のもっと詳しい説明とも異なっている。
- 46) Rosamund McKitterick, *The Frankish kingdoms under the Carolingians, 751-987*, London, 1983, pp.314-5.
- 47) イングランドの王位継承権を与えるという話は (ノルマンの歴史家たちが断言するように) Robert of Jumieges を経由して伝えられたか, または, (『アングロ・サクソン年代記』の「D テキスト」が主張するように) 1051 年秋に William がイングランドを訪問したときに直接伝えられたか, いずれかである。
- 48) 『アングロ・サクソン年代記』の「C テキスト」と「D テキスト」は使節の派遣を記録してはいるが, その目的については何も書いていない。それについて情報を提供しているのは John of Worcester である (*JnW* ii, pp.574-7)。
- 49) Philip Grierson, 'A visit of Earl Harold to Flanders in 1056', *EHR*, 51 (1936), pp.90-7.
- 50) Edgar はノルマンディ公 William の長男 Robert Curthose と同じ年齢で, 1052 年ごろの生まれである (Nicholas Hooper, 'Edgar the Ætheling: Anglo-Saxon prince, rebel and crusader', *ASE*, 14 (1985), p.29)。彼は 1058 年まではイングランドに連れて来られてはいないようである (King, 'Ealdred, archbishop of York: the Worcester years', pp.127-8, 130)。
- 51) Barlow, *Edward the Confessor*, pp.220-9.
- 52) ASC 'C', 'D', 1065, 'E' 1066, *JnW* ii, pp.600-1; Barlow (ed.), *Vita Edwardi*, p.79; Foreville (ed.), *Gesta Guillelmi*, pp.172-4.
- 53) ASC 'C', 'D', 1065.
- 54) ASC 'C', 1066

- 55) ASC 'C', 1066
- 56) ASC 'C' 1066. 『アングロ・サクソン年代記』の「Cテキスト」は、スタムフォードブリッジの戦いに関する唯一の同時代記述である。
- 57) *In search of the Dark Ages*, p.218.
- 58) William of Jumieges, *GND*, chapter 14.
- 59) ASC 'D', 1066.
- 60) *Bayeux Tapestry*; *JnW* ii, pp.604-5.
- 61) William of Poitiers, *Gesta Guillelmi*, pp.207-8.
- 62) *Carmen de Hastingsi Proelio*, pp.36-7.
- 63) *The Waltham Chronicle*, pp.50-57.
- 64) John of Worcester, *Chronicula*, ff 90-90v.